「不謹慎」のゆくえ

――「体験」をめぐって――

内田 友子

一．一九五二年の「不謹慎」

江口渙が大田洋子を怒らせた。

論争の原因は結局お互いの解釈の行き違いや、単なる言い回しのまずさなのかもしれない。両者の言い分を今日読み合わせてみると、プロのもの書きどうしの応酬にしてはあまりに単純で感情的だという印象を受ける。だが私たちはいま一度この二人の言い争いに耳を傾けなければならない。というのも、この単純で感情的な喧嘩はいまだに感情的に、そして複雑に続いているからだ。半世紀も経たところでこんなささいな喧嘩をむし返されようなどと、そのとき口角泡を飛ばしていた当事者たちは果たして予想し得たのかどうか。

二人の論争の経緯は、こうだ。まず江口渙が一九五二年の「新日本文学」二月号の文芸時評欄で「原爆小説二つ」（傍点内田。以下同じ）という小見出しのもと、「最近の雑誌に原爆にかかわりのある小説が三つ出た。」として、丸岡明「贋きりすと」（「群像」一九五一年十一月号）、阿川弘之「管弦祭」（「新潮」一九五一年十二月号）、大田洋子「城」（「群像」一九五一年十一月号）をとりあげた。小見出しに「二つ」とあるのは一見誤植かとも思われる。だが実際に江口が紙幅を費やして賞賛したのは「贋きりすと」と「管弦祭」であり、「城」については、

太田（ママ）洋子の『城』（群像・十一月）は『屍の街』『襤褸の列』とつぎつぎに力作をかいたせいか、さすがの原爆小説の本家本元も相当種ぎれのていと見える。もう一度広島にかえってもつといい種を仕入れてくるんだな。そうでしよう太田さん。（傍点原文）

と、これだけのコメントでやりすごした。評価に値するのは「二つ」だけ、とばかりに「原爆小説」の中から「城」を切り捨てる江口の辛口ぶりが小見出しのつけ方にも容赦なく表われてしまったわけだ。

これに大田洋子が咬みついた。一九四五年八月六日の被爆直後からその体験を小説として発表してきた大田は、「近代文学」（一九五二年七月号）による「作家の態度」というアンケートに答える形で反論した（傍線内田。以下同じ）。

江口渙氏が「新日本文学」で、「さすがの原爆ものも種ぎれと見える。広島え（ママ）行つて種を仕入れて来てはどうです、大田さん」と文芸時評で書いていました。このごろは文学者が文学者らしくもないことを書くのが流行つていますが、こういう不謹慎なことをいう暇に自ら広島に出かけて裏町の隅々にどれだけの原子爆弾不具者が辛じて生きているか、一眼（ママ）見て来るといいのです。

「不謹慎なことをいう」とまともに名指しされた江口は「大田洋

子に答える」（「近代文学」一九五三年三月号）という一文でうけて立ち、「原爆文学一般が種ぎれになつたとは、この私はどこにもかいていない」として両者の文章を並べて説明し、自分の批判があたかも原爆文学全般をさすかのように読み違えられてくってかかられては「相当めいわくだ」と不快をあらわにした。それでも最後には「大田洋子ももうこれ以上そんなつまらないことでいつまでも怒つていないで、大いに気をとりなおし心を新たにして、新しい原爆小説にとりかかつてほしい」と六十代半ばの江口が十六歳年少の大田をなだめる形でこの喧嘩を打ち切った。

話は少しわき道にそれるが、大学中退後、大正中期から社会主義運動、マルクス主義運動など思想活動に積極的に拘り、戦後は旧ナップの流れをくむ「新日本文学」主要メンバーとして文芸時評欄をしばらく担当していた江口渙に叩かれた作家は、なにも大田洋子だけではなかった。たとえば安部公房の「飢えた皮膚」を「すべてが思いつきと表現のアクロバット」、檀一雄の「燃える草舟」を「われわれが反戦平和をしんけんに叫んでいるのを無視する」かのような「戦争肯定の文学」、森三千代「放浪」にいたっては「ただ年をとつたためと作者ズレがしたことからきたアツカマしさ」の上に立った「文学的ストリップ」だとこき下ろしている（一九五一年十一月号の「文芸時評」より）。こうなってくると辛らつな批評というよりほとんど悪態だ。それが売りの古参とはいえ大田に限らずさぞかし当時は他の作家たちから反発を買っただろうと想像されるので、この論争にも実はもっと別の感情的な確執が背景にあったのではと勘繰りたくなるほどだが、ともあれ話を戻すと、少なくとも彼が「原爆小説」を非難していないことだけは確かなのだ。この点においては残念ながら大田の分が悪い。

「戦争反対」のスローガンが盛り込まれているか否かが作品の優劣の基準となる江口にとって、丸岡明や阿川弘之の作品からうかがえる綿密な事実調査やそれを支える文学的手法はじゅうぶん作品として魅力的だったわけだ。ちなみに槍玉にあがった「城」という作品の内容については、以降の小稿には直接関係しないので、被爆により身体的な障害を負った女の堕落した生活を描き、被爆者差別という社会問題を喚起する作品、という梗概にとどめ詳細は省く。問題は、「不謹慎」だ。

さて江口に「不謹慎な」と言い放った大田の反駁文を前後通読してみると、次のようなことに気づく。「よみちがえ」は指摘どおりだとして、それとは別に、「一人」という言葉が頻繁に繰り返されていることである。

私は私ひとりが書かなくてはならないのを、どんなにつらく思つているか知れません。一人では書ききれない。私一人に書かせておくのも、日本の作家の恥だと思うのです。

大田は当時広島の人的損害が三十五万人だときき、アメリカ占領軍による言論統制でその数字の発表が許されない状況を踏まえ、「このときから私の心は徐々に、原子爆弾の小説を一生書きつづける作家が、日本に一人くらいいてもいいと念願するようになりました。」とその切迫した使命感を訴えている。このように、「一人」という立場にこだわる大田の眼中に、たとえば江口が同じ書評欄でとりあげて見せた丸岡や阿川たちの仕事はまったく入っていないわけだ。さらに、原民喜が生きていてくれたら、峠三吉がもっと健康で十分に詩を書いてくれたら、「原爆の子」の子

等が大きくなって次々と大きな作品を書いてくれたら、「私はどんなに心が休まることでしょうか。」と嘆く。つまり、原爆に関する作品を書く資格は被爆体験者だけにある、という悲痛な責任感に縛られた結果、「不謹慎」という一言によって特権的な立場に自らを囲い込んでしまった経緯がこの反駁文からは読みとれるのだ。

二、一九七五年の「不謹慎」

『〈歴史〉はいかに語られるか』（ＮＨＫブックス、二〇〇一年四月）の中で著者成田龍一は「麦と兵隊」をとりあげ、火野葦平が新聞記事を読み「なるほどと思つて苦笑した」場面に注目する。火野が体験した孫圩での戦闘について、体験をした当事者の記述（＝火野）、出来事を統御し概観する当事者からの報告（＝報道部少佐）、出来事の全体を報道しようとする立場からの記述（＝新聞）、というようにひとつの出来事がここでは三つの水準で記述されている、と整理した上で成田は「苦笑」を次のように考察する。

自らの体験に意味づけと説明がなされたことへの「苦笑」であろう。当事者にとっての出来事の意味が、新聞の記述（全体的観点からの記述と意味づけ）とズレを示した瞬間である。「私」にとっては切実であり、かけがえのない体験であるが、その体験が全体においては、意味あいを異にしている。火野にとっては名づけられず説明できない体験が、新聞記事では「孫圩の陥落敵の殲滅は早時間の問題となつた」と客観化されてしまう。つまり、個人的な体験が全体性のなかへと回収されていくことに対する「苦笑」ともいえよう。

「個人的な体験が全体性のなかへと回収される」システムというのは新聞に限らず、語り部と呼ばれる人々の活動や、体験を描く文学など、「語る」「伝える」という場面で必ず生じる矛盾だ。たとえば原爆についていえば、ヒロシマ・ナガサキの体験者はあの日の体験がいかに悲惨なものであったかを語ることによって、原爆投下をひきおこすような事態（＝戦争）が二度と繰り返されてはならない、という普遍的な教訓に個人的体験を変換させ後世に伝えようとする。ところが、彼らが語り得る「個人的な体験」は「全体性」のごく一部にすぎない。「個人的な体験」が集まって「全体性」を成すことはあっても「全体性」そのものにはなり得ない。さらに体験を持たない人間との共有点をも含めた鳥瞰的な「全体性」（そんなものが実在するかどうかは別として）にたどり着くためには、「個人的な体験」の「個」としての性質は省略されたりときには捨象されてしまう、という矛盾がここに生じる。この矛盾に気づいたとき、語ろうとする者たちには「苦笑」が生じたり、あるいは逆に、感情的な苛立ちを抑えきれなくなったりするわけだ。私一人があの日を書き得る、という大田洋子の使命感を「文学」という地図にのせようとするとき、実はその地図には「私一人」という観点以外に、多種多様な観点（＝全体的観点）が点在している。その点をおおく線でつなぎ得る（＝共有点を持つ）作品のほうが少なくとも地図の中では広範囲を凌駕できる、と考えるのは少々図式化が過ぎるだろうか。もちろん広範囲を占めることが重要視されるのは、それが「語る」「伝える」という目的と連動するためだが。ともあれ、この「全体性」が強く意識

されたところに、次の作品をあげることができるだろう。

一九七五年に芥川賞を受賞した林京子「祭りの場」（「群像」一九七五年六月号）には、実際の新聞記事が作中に織り込まれ、次のように描かれている。

一九七〇年一〇月一〇日の朝日新聞に〝被爆者の怪獣マンガ小学館の「小学二年生」に掲載、「残酷」と中学生が指摘〟の記事がのっている。「原爆の被害者を怪獣にみたてるなんて、被爆者がかわいそう」女子中学生が指摘し問題になった。怪獣特集四五怪獣の中の、人間の格好をした「スペル星人」が「ひばくせい人」で全身にケロイド状の模様が描いてある。真意をただされた雑誌側は調べてからでないと何ともいえません、と答え、原爆文献を読む会の会員は絶対に許せない、と抗議の姿勢をとった。事件が印象強く残ったのは確かである。「忘却」という時の残酷さを味わったが、原爆には感傷はいらない。

これはこれでいい。漫画であれピエロであれ誰かが何かを感じてくれる。三〇年経ったいま原爆をありのまま伝えるのはむずかしくなっている。

被爆者ということであれば、林京子は長崎の被爆体験者である。当時、林は学徒動員で三菱兵器大橋工場に通う十四歳の少女であった。ちなみに大田洋子より二十七歳年少だ。

ここに引用された記事は、「原爆の被害者を怪獣にみたてる」ことの「不謹慎」さを問題視しているわけだ。このように「不謹慎」だと憤る者、一方でそれが「不謹慎」だということさえ気づかない者。この両者の混在が「三〇年経った」ところの「全体性」であると捉え、「これはこれでいい。」と断じることによって「祭りの場」は、大田洋子が「不謹慎な」とか、あるいは「私ひとりが書かなくては」といった焦燥感のもとで築いてしまった排他性や、いわゆる体験者の特権性という囲いを突き崩し、「全体性」の中の自分、という立場を強いて意識してみた作品と言えるだろう。もちろんそこには、「三〇年経ったいま原爆をありのまま伝えるのはむずかしくなっている」という問題意識が深く根をはっていることを見逃してはならない。

三．一九九〇年代の「不謹慎」

「不謹慎」をめぐる応酬はその後、毒舌とか読み違えとか、そんな他愛ないことを言い訳にして丸くおさめられるほど単純ではなくなっていった。私たちは、今度は沖縄戦体験をめぐる論争の中でこのことばとぶつかることになる。一九九七年八月四日「朝日新聞」の連載特集「「語り部」の向こう側―長崎・広島・沖縄」の記事に、大学生たちの次のような論争の経緯が紹介された。

一九九〇年十一月、東京の大学生たちが校外実習として沖縄を訪れた。本島南部の戦跡を巡ったり資料館を訪れたりする際の案内役は、沖縄の大学生がつとめた。東京の学生たちは実習期間中に自分たちで回し読みするために書いた「日記」を、後日、実習報告書の中に盛り込んで沖縄へ送った。実習で感じた「戸惑い」を素直に伝えたかったからだ。日記には、語り部の話を聞いたときの印象について、「不謹慎なことを言わせてもらえば（語り部は）〝酔ってる〟かもしれないとも思った」と書かれていた。ガ

イド役を引き受けた学生や沖縄戦体験者らは当然のことながら憤り、「沖縄戦体験者を侮辱しているとしか思えない表現などが際立っている。」「体験者は口を閉ざしていた。本来なら語りたくない戦場の光景を『語らねば』という思いにかられて口を開いた。その姿に接した時、『酔っているかもしれない』とは思わない。」と反発した。

これに対し今度は東京の学生たちが反論した。翌九一年九月、四十五ページの文集を作り、「皆さんの感想文を読んでいると、暗黙のうちに私たちの感想（の一部）に対して『これは戦跡巡りの感想としては認められない』と言っているように感じる」と記して沖縄に送った。正直な訴えを否定されたことへの怒りである。

この論争は、最初から「不謹慎」だということを前提にした点において、大田・江口の応酬や「ひばくせい人」のときよりも問題としては数段複雑だ。相手が感情的になってもそれをなだめすかして丸くおさめたり、回答保留という名のだんまり作戦をとったりはしないからだ。逆に、東京の学生たちは自らの「戸惑い」が沖縄側で認められないことへの憤りをぶつけている。この果敢（？）な「不謹慎」が登場した背景には、「語り部」たちの老齢化にともない、将来戦争を知らない世代たちに何をどうやって語り伝えていけばいいのか、たとえば修学旅行中の中学生たちが長崎の「語り部」の話を以前のように静かに聴かない、ときには野次をとばす、という状況を、非常識だということでくくって片付けてよいのか、という議論がある。これらの議論や、先の大学生たちのやりとりからは次のことが言えるだろう。それは、「語り部」の話を静聴するという場面に象徴されるような、「体験者」の「語り」を一方的に受け入れようしてきたこれまでの方向性が、半世紀という歳月を経ることによって今度は逆のベクトルを生んだということだ。そのベクトルとは、「体験を持たない」という立場（＝語り部の話に「戸惑い」を覚えたという「体験」）を「体験者」に受け入れて欲しい、という主張である。しかしこれは、考えてみれば当然のなりゆきかもしれない。目で見、耳で聞き、肌で痛みとして覚え、心で地獄だと感じたことはもちろん語るべき衝撃的な「体験」ではあるが、一方で、見ても聞いてもなく、痛んでもいないのに地獄を感じなければならない、歴史を担わなければならないことへの「戸惑い」も、言ってみればひとつの語られるべき隠微な「体験」なのだから。

四．今後の「不謹慎」

鼎談「戦争はどのように語られてきたか」（「週刊朝日別冊　小説トリッパー」一九九八年夏季号）の中で川村湊は、目取真俊「水滴」（「文學界」一九九七年四月）を「「ひめゆりの語り部」のような戦争の悲劇の物語化に対する批判になっている」と位置づけ、「戦争の語り方は多様であることが望ましいし、語られたテキストも多くあることが望ましい」と述べている。この考えのもと沖縄戦にまつわる噂話、怪談、ユーリー（幽霊）話を収集した川村は、広島にも同じような幽霊話があるのではと思って探したが見つけることができず、「やはり、広島ではまだ、そういう不謹慎さが許されていないのかな、と思いました」と報告している。「そういう不謹慎さ」というのはつまり、大田・江口論争の流れから

脈々と続く性質のものだが、それに対置したところでたとえば青来有一「雪の聖地」（「文學界」一九九七年六月号）を挙げることができるだろう。「原爆で死んだ人たちのつらく陰惨なイメージを逆転させたかった」という意図のもとに書かれたこの作品には、原爆による死者達が喉の渇きを癒すために「ぽわんぽわんと跳ねて、みんなで金魚のように雪を食べて」いるという、冬の爆心地の幻影が描かれる。この作品について青来は川村との対談で、

> 誤解されるかもしれませんが、小説の中で原爆の悲惨さを訴えたいとか、キリシタン迫害の歴史を追及したい気持ちは、とくに強くはないんです。むしろ長崎という土地が持たされている既成のイメージや物語をひっくり返してみたいという気持ちが強い。最新作の「雪の聖地」で、冬の爆心地を舞台に設定したのも、その思いからなんです。

と説明する（「文學界」一九九七年七月号）。誤解や不謹慎を恐れない試みが、「体験」の周辺で始まっている。むしろ、それらを恐れていては前に進めない段階に、「体験」の語りは立たされたと考えたほうがいい。「不謹慎」であることが（たとえば無関心であることよりも）問題を能動的に動かしていることだけは、確かだ。

ところで最後に、そもそも「不謹慎」とはいったい何だろう、と思い辞書でひいてみたので紹介したい。『日本国語大辞典第二版第十一巻』（小学館、二〇〇一年十一月）では「慎みのないこと。謹慎をしないこと。ふまじめなこと。また、そのさま。」との説明がある。一方、「恋愛」を「特定の異性に特別の愛情をいだき、高揚した気分で、二人だけで一緒にいたい、精神的な一体感を分かち合いたい、出来るなら肉体的な一体感も得たいと願いながら、常にはかなえられないで、やるせない思いに駆られたり、まれにかなえられて歓喜したりする状態に身を置くこと。」と説明したことでその斬新さが一時話題を呼んだ『新明解国語辞典第五版』（三省堂、一九九七年十一月）によると、「不謹慎」は次のように説明されている。

> 「心の抑えがきかず、衝動に任せて行動する様子。」

今後もさまざまな「不謹慎」によって、「体験」をめぐる議論がますます感情的に、複雑に、そしていくつもの世代を貫く問題として充実していくことを期待している、とたきつけて締めくくるのは不謹慎だろうか。